102×5～とうとう町長豆腐二丁　併せて二兆ホ長調～

高菜わさび

画面を見せて一分間

そもそもここから始まった。
たまたま暇つぶしになるものを探してた、そんな時に。

『これで、豆腐のあなたもコミュニケーションが取れる』

豆腐発声法というデータがフリーでダウンロード出来るようだった。著者は高菜…わさびとかいったか。

使い方
このデータの画面を一分、あなたの豆腐に見せるだけという胡散臭さ、まあ！でもフリーだしと、今日ついさっき夕食のために買ってきた豆腐のパックがあったので。
スッ
画面を見せて、一分ながいなと思った。
「まあ、こんなんで喋ったらな」
大変だよな。
「コンニチハ」
「えっ？」
声の主を探すが、そこには豆腐しかいない。
「コンニチハ、ハジメまして」
こうして豆腐は喋り始めた。

幸せ

「ようこそ、ここは世界中の商品が集まるお店だよ」
その店は古今東西が混じってる。
「あの～」
話しかけようとすると。
「いいものをあげるよ、さっき入荷したばかりだけど、特別だよ」
そういって豆を私の手のひらに、ザラザラと店員は乗せてくれる。
「これは？」
「それは大豆なんだけどね、一粒取って、後は普通の大豆と混ぜて、豆腐にするんだ、その豆腐を食べると、願い事を叶えてくれるよ」
「スゴいですね」
「でも、一粒だけで豆腐を作るんだよ」
「じゃあ、なんでこんなに沢山くれるんですか？」
そうするとニヤリと笑って。
「君にはたくさん、幸せになってほしいからさ」
その笑顔を見たら、背筋に何か寒いものが走るのだった。

「なあ」
男が女に話を切り出した。
「最近、俺に冷たくないか？」
「何よ、それ」
「その態度だよ、何だよ、俺のこと嫌いになったのか？」
「そんなことないわよ」
食卓での１コマ。
「そんなことある！」
「ない！」
口だけではケンカが終わらなくなりそうな、険悪な中で。
「お前たち！」
その間を割って入ったのは豆腐だった。
『豆腐の前で、豆腐が不味くなるような話をするな！』
あまりの気迫に、女は怯み、男は豆腐から女を守るように、その前に立つ。
「私たち…」
女は豆腐に説教されたことで冷静になる。
「少し話をする時間が足りないみたいね、ごめんなさい」
「いや、いいんだ、俺の方こそ」
お互いを見つめ合う二人。
ボッ
女は男の顔を見たら、顔が真っ赤になって、目を背けた。
「これから飯でも、食いに行くか」
「うん」
二人は手を繋いで、出かけることにした。

アンソニーが笑ってる。

「ＨＡＨＡＨＡ　これがジャパニーズＳＯＹジョークですね、今日は楽しかったです、トウフさん、ハママツさん、サヨナラ！」

満足して帰っていった。

「先輩、最後のアンソニーさんが言っていた、ＳＯＹジョークってなんですか？」

「あっ、浜松、豆腐ジョークの事か？」

顔色一つ変えずとんでもない事を言い出すこと、ブラックユーモアのことだが、豆腐は日本の食べ物と認識から、日本のブラックユーモアのことを言う。

「ニュアンス的には腹黒いってことかな」

「ああ、先輩は腹黒いこととボケは真顔ですもんね」

「お前こそ、先輩に対するツッコミは激しいな」

この作品は冷静なボケと情熱的なツッコミで支えられております。

優しい

「これって、どういうこと！」

一緒に暮らしていた彼に、女の影があったので問い詰めたら、そのまま分かれることになった。

「今日はみなさんに大切なお知らせがあります」

夏のボーナスを目当てに頑張って働いていたら、七月の頭に倒産の話をされた。

「もう！なんなのよ！」

行き場のない怒り。

「姉ちゃん、これでも食べなよ」

男に裏切られ、仕事も失った私に、豆腐だけは優しかった。

その後。

豆腐さんに労働局に行って、賃金立替の書類を書いてくるといいと勧められ、私は未払い分を手に入れた。

「そんなに、高くは出せないが、店を手伝う気があるなら」

再就職先が見つかるまで、私は豆腐さんのところでバイトをすることになった。

カタコト

「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ！」

繁華街は夜になると活気づく。

「どこの店行きましょうか」

「こう言うところで、そんなこというと、しつこく誘われるぞ」

「はい、先輩」

今日は奢りなので、いつもは生意気な後輩も、なんだかおとなしい。

そんな所に、アジア系の男性がやってきた。

「オニイサン、オニイサン、いいヤクミアルよ」

豆腐先輩はずっと、大曲のネギが美味しいからと、カタコトで営業されていた。後輩は面白そうに助けもしないで見ていた。

『〜口〜』

黒板に書かれた記号。

「はい、これはなんて読みますか」

某中学での話。

「なんですか？」

「それ」

「これは漂流です、豆腐が波間を漂っていますね、これは新天地を信じて、自分を探しに行ったら、漂流しちゃったという、深い意味があります」

「はい！」

生徒の一人が手をあげた。

「はい、軽井沢くん」

軽井沢は黒板の前に出て。

『固』

と書いた。

「これで高野豆腐ですか？」

「ふっ、甘いわね、口に古いで、熊本県五木に伝わる、豆腐の味噌漬けを意味するのよ！」

「この中に豆腐じゃない奴がいます」

□□□□□□□□□□□□

「なんだって！」

「どういうことだ！」

四角い白の塊達の間に動揺が走る。

「トロけても無駄だ！」

スッ！

□□□□□□□□□□□□

「杏仁はお前だ！」

□□□□□□■□□□□□

「私が杏仁です…」

「話はゆっくり、デザートの後にで聞こうか」

「…ありがとうございます」

こうして杏仁は捕まった。しかし、豆腐に憧れるものはまだまだ増え続ける一方だ、第二、第三の杏仁が現れるだろう、それでもトロけるものを見つける、それが俺の豆腐としての生き方だった。

楽勝

　最近の新人はどうかしてる。
そう豆腐達は思っていた。
吸水させるのも忘れるわ、遅刻して時間通りに起きないわ。
　「待て！」
　「何ですか？」
　ざるの中の大豆が叫ぶ。
　「虫食いアリの大豆がまだ残っているじゃないか！」
　「あ～そうですね」
　そんな新人に豆腐はおろか、工場でも頭を抱えていた。
　「豆腐ですか？楽勝ですね！」
　この間そんなことを言う新人に、お前に豆腐作りがわかってたまるか！と豆腐が体当たりを食らわした。

ツムジ

日付が変わる頃、豆腐職人は何度目かの夢の中にいた。

今日は同級生と飲み会だったのだが、予定ががっつり睡眠時間とかぶったので、行かなかった。

呼ばれたメンバーの中で、俺だけが生活の時間が違うので、友達は悪い奴ではないんだが、いつも飲み会の予定は俺のことを考えていないようだった。

「おはようございます」

工房に挨拶しながら入ってきて、まずすることは、昨日水に漬けておいた豆達に。

「調子どう？」

なんて聞くことだ。

水からあげたときに。

「どこかお痒いところはありませゆか？」

と聞くと。

「ツムジが痒い」

と答えたので。

「他にお痒いところありましたら、遠慮なく言ってくださいね」

特になかったようなので、次の行程に移っていった。

鬼ごっこ

転職して二回目の豆腐屋さんは、前の店とはだいぶ違っていた、まあ、店によってそういうのは違うものなんだけど。

「大豆が勢いで何かしても受け止めてあげてください」

「はあ」

それは例えだと思っていたが。

「こら、お前たち！」

「小笠原が来たぞ！」

「豆腐にされるぞ！」

昨日運ばれてきた、大豆達がそういって倉庫で鬼ごっこしてしまう。

今ではそれが例えでも何でもないというのがわかる。

「何でこの店の大豆は幼稚園児みたいにはしゃぎ回るんだ」

「それはね、小笠原くん」

「はっ、先代」

白髪の老人が教えてくれる。

「うちは大豆になんでもやらせてあげる、何をやりたいっていっても、反対をしないからなんですよ」

「はぁ、そうなんですか」

しかし、反対しなくなったら喋るわ、鬼ごっこはするわ。

「昨日のデートでチューとかした？」

色んなこと聞いてくるわで、面倒見る方が大変だった。

注意

「ふっ…」

醤油は豆腐を見ながら、見下したような笑みを浮かべた。

「白いね」

「何を！」

「まあまあ」

豆腐がケンカを買おうとしたので、なだめる。

「どちらも大豆から生まれたんだし！」

大豆から生まれても、理解できない物同士がいる、その最たるものは醤油と豆腐であって、お互いを白い奴、黒い奴と言い合ったりする。しかし、この家ではあまり喧嘩にならないのは、のほほんとした家主の時折的をはずれた発言があるからだった。

「遺伝子組み替え、注意、注意！」

製品になってしまった醤油と豆腐に向かって、こんなこと言われたら、醤油と豆腐はしょうがないなと言った感じで、とりあえず喧嘩はやめる。

が…

『あいつとは理解できない』

といつも思ってる。

豆腐に魂を売った男

燃え盛る城の前で…

「お前、人として恥ずかしくないのか」

「先に裏切ったのはあなた方の方だ」

「豆腐に魂を売ったのか！」

「それは否定はしません、しかし、米に税金をかけるのならばまだしも、大豆にまで税金を重くかけるのはどうでしょうね」

「それは…」

「他国にはよく売れるでしょうね」

豆腐に魂を売った男は元商人であった。

「あなた方は反抗した我々商人組合の人間を連行し、家族に苦痛を味合わせた」

大豆に税金をかけた役人は、恐怖で震えている。

「豆腐に魂を売った私は、人を殺めることを許されてませんから、命拾いしたと思ってません？」

豆腐に魂を売るということは、そういうことだというのは、この辺りでは一般常識だ。

「ほら、そこまで血眼であなたを探す人々が来てますよ、その人にも同じことをいってあげてくださいね」

「ヒィイイ」

その後、体制は変わったが、大豆には税金が高くかかったままだという、数年後、干ばつが起きて、この地方で大豆が育つ環境ではなくなった。

ここから東の、山に近い丘の上では、そこから持ち出された大豆の花が綺麗に咲いていた。

誠の姉

うちの姉ちゃんは意地悪だ。

特に就職してから、僕は心休まる日はない。

「ご飯よ」

ご飯の時間が来た。

「早くそこ座りなさいよ」

「うん」

姉は結構僕の同級生からは人気が高いのだが、僕からするとなんでなのか、まったくわからない。

「いただきます」

ご飯を食べると、あれ、何かおかしい。あっ、これは…

「姉ちゃん、豆腐だろう、これ」

「ふっふっ、今日はわかったようね」

食品会社に勤めてから、何かしらこういうことを企んでくる。

今食べているのは、高野豆腐をご飯の形にしたという豆腐ご飯で、これを白米と混ぜて炊くと、栄養が取れる奴で、僕はこれを知らないで食べた時。

「ねぇ、誠、あなたはお米と豆腐の区別もつかないの」

そこで勝ち誇った顔で笑うのだ。

だから僕は、豆腐ご飯は美味しいとは思うけど、就職してからの姉ちゃんが意地悪で苦手なのだ。

予告状

会社に出社すると、机の上に一枚のカードが。

【今日のランチはあなたに食べられます】

「これが噂の豆腐予告！」

豆腐達が今日食べられたいあなたに出すという予告状。

「あれでしょう？柳田くん、豆腐予告が来ると宝くじが当たるとか」

「そうですよ、先輩、帰りに宝くじ一緒に買いましょうよ」

不景気だからこそ、盛り上がったのだが、豆腐予告が来ると、何かしら幸運が舞い込むという話だが…

「おや…」

部屋の扉の廊下を猫ではなく、豆腐がスーと通りすぎていった。汚れ具合から野良豆腐だろう。

「おいで、おいで」

味噌汁用のダシ昆布で釣って、捕まえて、水で良く洗って飼うことにした。

「名前、なんてしよう」

名前につけなれていない、俺は名前をつけることがこんなに楽しいことだって思わなかった。